

聖書：マタイ 11：7～19

説教題：ヨハネより偉大な者

日時：2019年5月5日（朝拝）

前の 11 章 1～6 節では、バプテスマのヨハネが牢屋からイエス様に質問をしました。イエスはメシヤであると伝えて来た彼が、何と「あなたが本当にメシヤなのでしょうか」と使いを遣わして尋ねたのです。あのヨハネでさえも、ある種の疑問が頭の中をかすめた時があったのです。そんな彼にイエス様は「わたしにつまずかない者は幸いです」と言われました。今日は繰り返して見ることはしませんが、イエス様が仰ったことは、あなたの勝手な期待でわたしを計り、つまずいてしまうのではなく、真実なわたしの姿をよく見つめて、わたしに従って来なさいということでした。ヨハネにとって大きな励ましのメッセージだったと思います。

さて使いが帰った後、イエス様はこのままではヨハネについて誤った印象を人々に与えかねないと思われたのでしょうか。ヨハネをご自身はどう見ているのか、またヨハネとご自身の関係をどう見ているのかについて語って行かれます。まずイエス様が言っておられることはヨハネの偉大さです。7 節でイエス様は「あなたがたは何を見に荒野に出て行ったのですか。風に揺れる葦ですか。」と言います。3 章 1 節に書かれていた通り、バプテスマのヨハネが現れたのはユダヤの荒野でした。その荒野へ人々は出て行きました。何のためでしょう。風に揺れる葦とは揺らぎやすいもの、定まらない人を指します。ヨハネはそんな人ではありませんでした。彼は確固たる人、決然とした人でした。イエス様はある人々が先のヨハネの質問から抱いたかもしれない印象をこうして打ち消そうとしたのかもしれませんが。では柔らかな着物を着た人かと 8 節で問います。柔らかな着物を着た王なら宮殿にいる。ではなぜわざわざ荒野へと出て行ったのか。預言者を見るためか。その通り！とイエス様は言います。当時イスラエルに預言者は一人もいませんでした。旧約聖書最後のマラキ書以降、預言者がいない沈黙の期間が続いていたのです。そんな中、ついに現れた預言者を見に、人々は大勢、荒野にいたヨハネのところへ出て行ったわけです。

しかしイエス様はヨハネはただの預言者ではないと言います。預言者よりもすぐれた特別の預言者だと言います。どういう意味でしょうか。それはヨハネが預言された預言者であったということです。10 節で引用されているのはマラキ書 3 章 1 節です。メシヤ

が遣わされる前に、まず先駆者としての使いが遣わされる。そういう預言者の出現が預言されていました。ヨハネはその人です。さらにイエス様は 11 節で「まことに、あなたがたに言います。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネより偉大な者は現れませんでした。」とまで言われました。ある人はこれを読んで驚くかもしれません。ヨハネはそんなに偉い人なのか。アブラハム、モーセ、ダビデ以上なのかと。しかしこれは人格的な意味あるいは道徳的な意味ではなく、歴史におけるその人の位置と関係する表現です。この後、13 節に「すべての預言者たちと律法が預言したのは、ヨハネの時まででした」とあるように、ヨハネは旧約預言者の最後に位置する人でした。それまでの時代の人々の中で最もイエス様に近く存在した人です。またイエス様を目の前にして、この人が約束のメシヤです！と人々に指し示した預言者です。そういう意味で彼はそれまで女から生まれた者の中で一番偉大な者、優れた者と言われているのです。

この言葉を受け止める時に、さらなる驚きとして私たちに迫って来るのが、イエス様の次のお言葉、11 節後半の「しかし、天の御国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です」という言葉です。今、ヨハネより偉大な人はいないと言われたばかりなのに、そのヨハネより偉大とはどういうことかと思うかもしれません。しかしこれも救いの歴史における位置の問題です。ヨハネはイエス様を見て、この方こそメシヤである！と人々に指し示しましたが、その彼はまもなく地上の生涯を終えます。彼は主のお姿を肉の目で見ましたが、主の十字架の出来事は見ていません。また復活も見ていません。つまりヨハネは新約聖書に出て来る人ではありますが、実質的には旧約に属する人だったのです。それに対してイエス様の十字架と復活を経た後の人は、ヨハネ以上の祝福にあずかる人と言えるのです。この後、13 章 16～17 節にこういうイエス様の言葉が出て来ます。「しかし、あなたがたの目は見えているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。まことに、あなたがたに言います。多くの預言者や義人たちが、あなたがたが見ているものを見たいと切に願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと切に願ったのに、聞けませんでした。」ある意味でバプテスマのヨハネはピスガの頂から約束の地を眺めたモーセにたとえられます。モーセは約束の地の直前まで民を導き、そこを遠くから眺めることは許されましたが、そこに入ることはできませんでした。そういう彼よりも、乳と蜜の流れる地に入り、その祝福を味わった小さい者たちの方が、より大きな特権にあずかったと言えます。もちろんこのことは、ヨハネは天国に入れないという意味ではありません。8 章 11 節で「多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます」と言われたよ

うに、旧約時代の聖徒たちももちろん天国に入ります。イエス様がここで言っている天の御国とは、イエス様の到来とともにこの地上に現れ始めた神の国、神のご支配のことです。ヨハネは確かにそれまでの時代の誰よりも偉大だと言われる祝福にあずかりましたが、天の御国の祝福にあずかる人は、そのヨハネ以上だとイエス様は言っているのです。ですから今日の主を信じる私たちも、ヨハネよりはるかに偉大と言われる祝福に生かされている者たちであるということになるのです。

二つ目に見たいのは 12～15 節までのイエス様の言葉です。12 節に新しい時代の特徴が語られています。それはバプテスマのヨハネの日から今に至るまで天の御国は激しく攻められているということ、そして激しく攻める者たちがそれを奪い取っているということです。ここは解釈が難しいところです。これと違った訳も色々と提案されています。しかし結論から言えば、この新改訳の訳で良いと思われます。言われていることは天の御国に対する反対活動、抵抗活動が激しいということです。まさにヨハネが今、牢屋に捕らえられているという事実がそれを物語っています。また前の 10 章では人々の様々な反対活動、迫害活動があることについてのイエス様の警告の言葉が多く述べられていました。そしてこの天の御国に対する反対活動は、この後、イエス様を捕らえ、イエス様を十字架につけることにおいて最も顕著な仕方で行われることになるでしょう。この世はそのように神を拒絶し、神の国の現れに抵抗して戦いを挑むのです。そして 12 節が言っていることは、バプテスマのヨハネはそれほどに神の救いの歴史における特別な位置を占めるということです。ヨハネは歴史を大きく二分する節目にいる人なのです。13 節に「すべての預言者たちと律法が預言したのは、ヨハネの時まででした」とありますように、ヨハネをもって旧約時代は終わりを告げます。また 14 節に「あなたがたに受け入れる思いがあるなら、この人こそ来たるべきエリヤなのです」とあります。先ほど、旧約聖書最後の書であるマラキ書にバプテスマのヨハネ出現のことが預言されていたことを見ましたが、その書の最後の 4 章 5～6 節にこうあります。「見よ。わたしは、主の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。」そこで預言されていたエリヤ、メシヤの先駆者として神が遣わした器がヨハネであるとイエス様は言っています。そして 15 節で「耳のある者は聞きなさい」と言います。その意味は歴史におけるヨハネの特別な位置を良く認めるということです。彼が旧約時代の頂点に立つ人である。彼は新しい時代をこの世界に切り開くために神から遣わされて大切な働きを担った人物である。その意味で彼はそれまでの誰よりも偉大。しかしこのイエス様のメッセージに耳を澄まし

て聞く時に見えて来ることは何でしょうか。それは今やとてつもない恵みの世界が私たちの前に到来しているということではないでしょうか。神が約束されたメシヤはついにここに来ている。その方による天の御国はここに現れ始めている。その祝福にあずかる人は、これまでの人間の中で最も偉大と言われるヨハネよりもさらにさらに勝る祝福に生きる人である。このような時がイエス様とともについにやって来たことを受け止めて、私たちはその祝福に生きる者とならなければなりません。

ところがでした。第3に見たいことは、この素晴らしい天の御国が到来しているのに、人々はこれを受け入れないということです。16～17節には、広場に座って他の子どもたちに呼びかけている子どもたちのたとえが語られています。彼らは他の子どもたちに、これこれの遊びをしようと呼びかけますが、相手がそれに乗ってくれない。結婚式ごっこをしようと言って笛を吹いてあげたのに、君たちは踊らなかった。逆に葬式ごっこをしようと呼びかけて弔いの歌を歌ってあげたのに、君たちは胸をたたいて悲しまなかった。そのように文句を言っています。これをもう少し具体的に言うと18～19節のようになります。「ヨハネが来て、食べもせず飲みもしないでいると、『この人は悪霊につかわれている』と人々は言い、人の子が来て食べたり飲んだりしていると、『見ろ、大食いの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ』と言うのです。」バプテスマのヨハネは人々に悔い改めを説き、荒野で断食する生活をしました。すると人々は彼を見て言うのです。一緒に笛を吹いて踊ろうと呼びかけても彼はダンスをしなかった。いつも彼は食べもせず、飲みもしない。我々はもっと楽しい生活がしたかったのに。あれは悪霊につかわれているのだと。一方、イエス様はヨハネほどの断食の生活はされませんでした。前にヨハネの弟子がイエス様のところに来て、なぜ断食をしないのかと問うた記事がありました。そしてしばしば取税人や罪人たちと喜びの食事の交わりをされました。それを見て人々は言うのです。「我々はもっと厳かで静かな宗教生活をしたかったのだ。なのにあの陽気さは一体何か。罪人たちと食事会なんか開いて。あれはただの食いしん坊の大酒のみだ!」と。こうして人々は、自分たちが望むあり方とは違うと理屈をつけて、ヨハネもイエス様も退けたのです。

しかし19節最後に「しかし、知恵が正しいことはその行いが証明します」とあります。少し難しい表現ですが、この意味は、人々が受け入れないからと言って、このことが地に落ちるわけではないということです。神の知恵の正しさは、そこから出る行いが立証する。人々は色々言うかもしれない。自分たちの好みに合わない理屈をつけて拒

絶するかもしれない。しかしヨハネを送り、イエス様を送った神の知恵は決して無に帰すことがない。その正しさは必ず行いをもって立証される。だから私たちは一時的な人々の意見に流されず、その行いに良く注目すべきであるということになります。

イエス様の生涯には何ら責められるべき罪はありませんでした。I ペテロ 2 章 22 節：「キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、云々」。むしろイエス様は神の御心の現れである律法に全くかなう歩みをされました。マタイ 5 章 17 節：「わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。」そしてイエス様が律法に全く合致する生活を送られたと言う時、それは単に誰からも後ろ指をさされない正しい歩みをしたというだけではありません。イエス様は律法が示す愛の命令をも完全に行って行かれました。私たちが愛し、あわれみ、私たちの救いのために、聖く尊いご自身を十字架上にささげることにより進んで行かれました。神の知恵は、私たちがのような罪人を、無限の価値を持つキリストの十字架の死を通して救ってくださる愛のわざにおいてこの上なく高らかに示されて行きます。この神の素晴らしい救いにあずかるために、私たちはヨハネの「悔い改めよ」というメッセージに聞くことが必要なのです。当時の人々は、ヨハネは、もっと楽しくやろうと言っても、そうしてくれない。笛を吹いても踊らないと言って退けましたが、私たちが第一にすべきことは何か楽しいことをして笑うことではありません。踊ることはありません。ヨハネが述べたように、神のさばきの日はいよいよそこまで迫って来ています。ですから私たちがすべき第一のことは、遅くならない内に悔い改めること。灰とちりを頭にかぶってひざまずくこと。自分の罪について嘆くこと。これが先です。そのようにする時、キリストにおいて差し出される赦しと救いを受け取る者とされる。こんなどうしようもない者を御子の尊い十字架の犠牲を通して救ってくださる神の知恵を知り、真の喜びの祝宴に加わる者とさせられるのです。

私たちは今日のメッセージの前でどう応答する者でしょうか。イエス様は「耳のある者は聞きなさい」と言われました。また「あなたがたに受け入れる思いがあるなら、ヨハネこそ来たべきエリヤだ」と言われました。その彼が来たということは、とりもなおさず私たちの前には待ち望んだメシヤが来ているということです。それまで最も偉大な者だったヨハネが経験した以上の恵みをもたらすお方として。そのメッセージに聞いて、私たちは当時の人々のような不信仰ではなく、ヨハネを通し、またイエス様を通し

て語っている神の知恵に聞き、これに生かされる者でありたいと思います。またその神の知恵にあずかった私たちは、そういう者とされたことをその生活に立証して行く者でなければなりません。19 節の最後の言葉、「しかし、知恵が正しいことはその行いが証明します」という部分は、ルカの福音書の平行記事では次のようになっています。「しかし、知恵が正しいことは、すべての知恵の子らが証明します。」(7 章 35 節) つまりこの神の知恵を受け入れた者たちの生活にも現されて行かなければならない。知恵は必ず「行い」に現れるのですから、その知恵をいただいた私たちも、その特性が行いに現れて行かなければならない。神がキリストにあって、今やヨハネよりも偉大と言われる祝福に私たちを生かしてくださることを感謝しつつ、その恵みに生かされている自分であることを私たちの生き方に現して行く者であるように。そのことを通して神の知恵の正しさを証明し、また神の知恵を証しする天の御国の民の歩みへ進みたいと思います。